

報告番号

※

第

号

主 論 文 の 要 旨

論文題目

折口信夫の「性」と「政」——「折口像」の問題

氏 名

永井真平

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、民俗学者・国文学者である折口信夫の営みを、同性愛者という彼のセクシャリティと、彼の政治的な振る舞いの両方を視野に入れて論じたものである。その際には折口を論ずるということが常にある種の折口信夫に対するイメージ、「折口像」を立ち上げる営為に外ならないということに注意を払った。

本研究は三部、八章よりなる。

第一部「「折口像」を立ち上げるもの」では、折口の営みそのものではなく、評伝や創作の中で語られる「折口像」の問題を取り扱った。

第一章「小説としての「わが師折口信夫」——同性愛と同性社会を巡って」では、従来折口の同性愛を「暴露」するものとして受け取られがちであった、折口信夫の「男」弟子である加藤守雄の「わが師折口信夫」を、小説の語り、構成によって同性愛者としての「折口像」を築き上げたものだと分析した。そこで立ち上がる「折口像」は「折口」の同性愛的欲望を描いたものであったが、同時にそれは「加藤」の同性社会的欲望を隠蔽しつつ表現もしていた。このような観点から、「わが師折口信夫」は折口信夫の特異性を語りながら、同性社会一般が抱え込む問題を批評する可能性を持つと評価した。

第二章「『信夫とひでの嬢子瑩』が見せる「折口信夫」の姿——その抵抗と反復」では、折口信夫の「女」弟子である穂積生萩の『信夫とひでの嬢子瑩』を取り扱い、加藤守雄や池田弥三郎といった「男」弟子らが立ち上げ、流通させていった「折口像」の外部、周縁に位置づけられた彼女が、折口の若き日の婚約者上野ひでの存在を取り上げること、折口の同性愛を本質化することによって「折口像」の奪還を試みていく様子を検証した。そしてそれが、男たちの「折口像」に対抗的でありながら、近年の安藤礼二ら提出する「少女」としての「折口像」と重なっていくことから、「折口像」を形成するという営み自体が折口に自己の欲望を投影することに外ならないことを論じていった。

第三章「実像を拒む「折口信夫」——大塚英志「木島日記」の試み」では、フィクションである折口像を提出する大塚英志の「木島日記」を取り上げて、その可能性を探っていった。大塚は民俗学の持っていた偽史的欲望に注目し、それが表現される場としてフィクションを描き出していた。そしてその中では先行する「折口像」を組み替えることによって虚構としての「折口像」が作られていき、その「性」のありようが描き出されていくのである。「木島日記」のそうしたあからさまな虚構としての振舞いが、「大きな物語」に回収されかねないような、「真実」を志向する「折口像」に対する処方箋となる可能性を評価していった。

第一部ではこのような三つの論考を通して、「折口像」を築き上げるという行為の意味と問題を論じていった。第二部「「性」なる「折口像」」では、第一部でのそうした見解を前提に折口の「死者の書」「身毒丸」「口ぶえ」という三作の小説を取り扱った。「折口像」自体を否定するのではなく、その中で本研究が提出し得る「性」的な「折口像」を模索したのである。

第四章「「死者の書」の往還——蘇りとその可否」では折口の長編小説「死者の書」の分析を行い、折口の「性」と、そこで語られる「死者」の蘇り問題を論じた。「死者の書」が「倭・漢・洋の死者の書」が縊り合わさってできた作品であるということと、「死者の書」の初刊以降の形態がその「初稿」を大きく組み替え書き換えることで成立しているという事実に着目し、安藤礼二が「死者の書」の初稿が折口にとって特別な「死者」を蘇らせようとした試みであったと評価したのに対し、初刊以降の形態は、昭和十八年刊行の時期に折口の周りに濃密に取り巻いていた「死」の時代への意識が、死者の蘇りというヴィジョンを断念させたものであったと評価した。

第五章「折口信夫「身毒丸」の女人——源内法師の「龍女成仏」」では、従来、折口による説経節の研究の成果であると同時に、「女嫌い」を始めとした折口の同性愛の性質を語るものとして読まれてきた「身毒丸」を、説経における両義的な女性観を表す「龍女成仏」という思想を基に折口が自身の女性に対する意識を練り上げていったものとして読み解いていき、「身毒丸」が説経研究の成果であると同時に、折口が「女性」に向き合い自身の「性」を凝視した物語であるということを検証した。

第六章「「口ぶえ」という出発——性と死の交点」では、自叙伝として読まれ、同性愛を告白したものとして今日的な視線に晒されることで、しばしば同性愛に対する罪責感が読み込まれてきた「口ぶえ」を、掲載紙『不二新聞』や同時代の文脈に置き直す作業を行った。「不二」には「性」を民俗や古典の側面から扱うものと、科学的言説によって扱うものが同時に展開しており数多く掲載されており、「口ぶえ」によって表現される同性愛はそうした性言説の一部として存在しているのである。また、「口ぶえ」の中の「死」は、折口の藤村操に対する言及などから同世代人がくぐり抜けてきた「煩悶」の問題としては理解することができる。こうした分析を通して、「口ぶえ」

が「不二」という場の性格や同時代の空気と呼応しながら、古典を用いて、自己の性を語るという方法を折口にもたらしたと論じた。

第三部「政」なる「折口像」では、第二部までが「折口像」や折口の「性」が持つ権力性や抑圧という形や、性政治に関わる形で間接的に「政」を論じてきたのに対し、直接的に折口が同時代の社会的問題にどう向かい合っていたかを検証した。

第七章「折口信夫の「農村と都市」——守矢豹司と釈迦空」では、折口が農村恐慌下の日本にあって「農」というものに対する自分の意識を「守矢豹司」という名で作られた「詩」によって表現したことを重視し論考を進めた。その詩の中で、折口は自身が含まれる都市住民が農村から疎外され、農民と対立する姿を表現する。しかし同時期において折口は、土地に根ざさない存在は「みさげられた」存在であると「農」を顕彰してもいた。折口学の「みこともち」という概念では土地を逐われたものは神の言葉を伝える聖なる存在であるとされるのだが、折口の中で彼らは「職人」というカテゴリーで都市住民をその中に包摂し、天皇と結びつく。それは農本主義的思考が天皇と「農」とを結びつけるのと対照的であり、都市住民の憤懣をすくい取り、農本主義的ファシズムに対抗する可能性があったが、天皇制に包摂することができない「朝鮮人足」や「さんか」といった存在をも天皇と接続するのは、農本主義的暴力の鏡像でもあった。折口が守矢豹司の名で発表した農村詩はそうした負の側面と切り離せないが、それでも日本の歪みを捉えたものとして一定の評価を行った。

第八章「折口信夫の「新国学」——國學院という場所」では、折口の提唱する「新国学」の問題を追及していった。折口は学問の総合性や倫理性といった観念を折口以前の国学者たちから継承していった。しかし折口の時代において「国学」は既に、「国文学」への対抗意識によって自己定義を行っていたのであった。折口は「国学」の独自性として時代状況に公憤を発するということを主張していた。それは従来、二・二六事件などのテロルの暴力性に対する批判として高く評価されてきたが、折口は「国学」を「気概の学」とし、二・二六事件を起こした皇道派将校たちの「気概」は認めていたのである。その意識は二・二六事件を詠んだ折口のいくつかの歌の分析を通じて読み取ることができた。それらの、國學院の「国学」が二・二六事件のような出来事と関わるのだという折口の意識は、折口を擁護することで閑却されてはならないものであることを示した。

以上八章の論考を通じて、折口信夫の「真実」を語るような「折口像」に対しては、それを受容することに対しても「折口像」を提出にするに当たっても慎重であるべきだという知見と、「性」と「政」の振る舞いにおいて、ある一つの解釈としての「折口像」を常にずらし込むような回路を担保する折口の姿を見ることができた。その両面のいずれかを真実とするのではなく、評価と批判をせめぎ合わせた批評が「折口像」には必要なのである。